

# 蔵彝走廊の少数民族、 その生活と変貌および基層文化

——松岡正子『**青蔵高原東部のチャン族とチベット族**  
——2008 汶川地震後の再建と開発』

あるむ／2017年3月／【論文篇】542+2頁【写真篇】282頁／16000円＋税



塚田誠之

はじめに

近年の中国は、経済発展が一層加速し、壮大な「一带一路」政策が世界の大国への動きとして注目を集めている。民族に関する動きとして「中華民族」の一体化が強調されている。人口の圧倒的多数を占める漢族が中心になりがちであるが、五六の民族が公認されており、多数の民族集団が広大な地域を舞台になが歴史の中で接触交流を重ねて、国家の民族政策も関わって、現在の多民族国家が形成されてきたのであり、諸民族集団やその文化の形成史と現状について理解を深める必要がある。

さらに住民の生活について、沿海部の大都市のそれや農民の出稼ぎ、都市と農村の格差の問題がメディアで取り上げられるものの、少数民族がどのような暮らしをしているのかについては十分に知られていない。中国の現状を多角的に理解するためには、家族や親族、衣食住、経済、婚葬、年中行事など諸方面から諸民族の生活文化の検討を行う必要がある。

青蔵高原東部の、四川省・雲南省・チベット自治区の三省区が隣接する山脈部と高山峡谷部からなる横断山脈区域である「蔵彝走廊」は、漢族・チベット族の二大勢力の間の境界にあつて、歴史的に多くの集団が接触交流をして多様な文化が形成され、現在はチン族やチベット族諸集団などの居住地である。二〇〇八年五月に発生した汶川大地震は記憶に新しい。震災からの復興がどのように行われ住民の暮らしがどのように変化しているのか、多くの関心が注がれている。

本書は、汶川大地震後の復興の現状をめぐる諸問題と蔵彝走廊における諸民族の文化について、長年この地域の諸民族を研究してきた著者による論文と写真の両面からの研究の成果である。

### 論文篇の構成と内容

まず序章で、本書の問題の所在、研究の方法、構成が提示されている。主目的は、汶川大地震後の復興について、復興政策が終了した後のチン族地区における開発と課題について、とくにチン文

化が観光開発によって創出される動きとそれが従来の文化に及ぼす影響、さらに蔵彝走廊における四川チベット族諸集団との比較検討を通じてチン族との文化的類似性や継続性を考察することが示されている。研究の方法はフィールドワーク、とくに定点での短期反復調査による。構成は、論文篇は全十一章のうち第一部の一〜五章がチン族をあつかい（うち第二・三章が震災後の動き）、第二部の六〜十一章が蔵彝走廊の四川チベット族諸集団や雲南側のプミ族・ナシ族をあつかっている。後半部分は、各集団の概況、婚姻状況、祭祀とくに祭山活動における文化的類似性を検討することが示されている。さらに付論「四川における一九五〇〜六〇年代の民族研究」が、中国人類学に大きな影響を与えたゆえに付することが示される。くわえて写真篇の構成が示されている。

各章にはまとめがあり要を得た整理がなされており、屋上屋を重ねるかもしれないが、以下に論文篇の各章の概要を記す。

第一章は近年のチン族に関する文化人類学的研究の内容と課題である。震災後、中央政府がチン文化の保護と復興を国家的な文化政策の一つとして取り上げ、「羌笛」「羌族刺繡」「羌年」などチン族の無形文化が各級の文化遺産に指定されたことが示される。また政府からの援助を受けて、専門のデジタル博物館である「羌族文化数字博物館」が作成されたことが示される。ついで、口頭伝承による宗教的職能者シピの全経典を初めて漢文にした試みが示される。

第二章は、汶川地震後の被災民の移住と移住にともなう生活の変化に関して、いくつかの村落の事例から検討している。まず中国西部辺境の民族地区に共通する問題である貧困について、震災によって貧困が一層深刻になったことが示される。ついで被災後の高山部からの移動について、都市部あるいは近郊に集団で、あるいは分散して移住した事例が示される。移動は出稼ぎが恒常化した一九九〇年代からすでに始まっていたが、被災によって大規模な移住が起き、村落が

無人化し解体したことが示される。

こうした移住の背景には政府の新都市化、農業の現代化の政策がある。新都市化は農民を県城などに移住させて農村部の新たな都市化を推進するものである。住民が移住を決断する大きな要因は教育と医療である。教育について、農村では学校の統廃合が進み、小学校は郷鎮の、中学校は県城のそれに統合される方向に進んできた。農業の現代化とは、企業などに土地使用権を貸与する「土地流転」による農業活動の大規模化や農村の余剰労働力を小都市に移住させて農業以外の仕事に従事させることにある。

第三章は、汶川地震後のチャン文化の復興再建について、政府側の復興方式とその問題点、住民側の言語の喪失を中心とする文化の現状について検討している。中央政府側の復興の特徴は、三年という短期間で、国内の他の省市が資金・人員・資材などを提供する「対口支援」方式をとり、「現代的チャン文化の創出」を目指して、二〇〇〇年代初期には始まっていた観光開発を促進し、外観上

「ホンモノよりも美しい村」（北川県吉娜羌寨）を作り、政治的業績として見えやすいハコモノを突貫工事で作った。結果、「巨大都市なみの大規模で最新式のハコモノが立ち並ぶ」（汶川県）状況に陥った。汶川県城には「大禹」の巨大な銅像を作り多民族融合の表象とし、「岷江モデル」にそって、「正統的」なチャン文化を代表するシンボルとして白石と羊角の装飾を建築物にほどこし、石積み風の一見伝統的な建築や石礮を持つ民俗観光村を幹線道路沿いに作った。

しかし、それらは「外部から与えられた」もので、文化の担い手である住民の意志があまり考慮されていなかった。北川県のように、漢族が多かったのが、一九八〇年代にチャン族に変更したため「漢族の村にチャン族の村を作った」場合（吉娜羌寨）はなおさら住民の関心が薄かった。

チャン族の自言語消滅の危機の問題について、一九八〇年代から二〇〇〇年代において出稼ぎや経済作物の生産などの産業構造の変化、また漢語教育の早期

化・徹底化など、震災以前からの経緯をふまえて、とくに南方方言区で言語喪失の危機にあること、また、政府の政策における民族言語保護の視点の欠如、民族文化の将来を決定するのは民族自身によるボトムアップの力であることが指摘されている。

第四章は羌年と祭山会が検討されている。本書の構成上、震災後の復興の検討は第二・三章でなされており、第四章で藏彝走廊に居住するチャン族、ギャロ・チベット族、川西南チベット族、プミ族に共通する儀礼として祭山会が検討され、第II部の川西南チベット族諸集団の検討につながっていく。まずチャン族の新年「羌年」について地方政府主導の祭山会が行われるが一過性に終わったこと、他方、被災後の移住先では、村の長老組が中心となって集団的な羌年活動を実施したこと、それゆえ民族文化を維持していくのは住民自身でなければならぬことが示されている。ついで各集団に共通する祭山会の特徴が示される。祭場の空間構成、祭祀方法、固有の宗教的職

能者シャーマンの存在、実施期間が検討される。さらにここでチベット仏教ゲルク派伝来以前の信仰が重要な鍵であることが示唆されている。

第五章は、民国期に漢族側から「略奪殺人集団」「獐獐子」とみなされた黒水チベット族について、そうした伝承の創出の要因が示されている。また、チベット仏教を受容しつつも、信仰の深層部分では祭山会や白石などに土着的な要素が根強いことが示されている。

第六章以降は蔵彝走廊の各民族集団の調査に基づく検討である。まず第六章で蔵彝走廊研究叢書をはじめとする先行研究、石碶、川西南「西番」に関する呼称と歴史、民族識別工作とその内実が示されている。民族識別についてはナムイ・チベット族出身の民族幹部穆文富が、雲南側がプミ族としたのに対して仏教信仰の観点からチベット族とすることを主張し実現したという。

第七章以降では七集団が取り上げられる。それらは第四章で示されたように共通の基層文化を持つ。第七章は、ナム

イ・チベット族と〈西番〉が扱われている。ナムイの生業や生活・教育の変化、祭山会、〈西番〉の祖先の西蔵からの移住伝承、さらにナムイが土着の信仰を色濃く残すというボン教を信仰していることが示される。

第八章は、アルス・チベット族について、婚姻慣習から「西番」意識がどのように形成されたのかを検討している。シャーマンとボン教ラマが婚礼等に役割を果たしており、それらに対する信仰が重要な紐帯であることが示される。

第九章は、木里蔵族自治州のシヒン・チベット族と〈西番〉が取り上げられ、婚姻、継承、葬儀などが検討される。冠婚葬祭中、最も重視される葬儀には木里大寺（かつて土司が大ラマを兼ね土地を領有した）から大ラマを招いて経文を読んでもらうこと、一家に複数の男子がいる場合は一人以上のラマを出したことで、さらにラマに経文を学んだシャーマンがおり、伝統の正月「ヲシ」に山神を祀ることが示される。

第十章は、四川と雲南のプミ語集団に

ついて、かつては「大西番」と呼ばれていたが、民族識別において雲南ではプミ族に、四川では仏教信仰ゆえにチベット族になったことが検討される。また両者の経済状況や家族の検討、祭山会に見られる共通性が示されている。

第十一章は、四川と雲南のナシ語集団について、独特の婚姻習俗「アダ婚」と近年の変化、祭山会、祭天活動が共通の要素として検討されている。

付論では、建国以来、民族訪問団、識別調査、社会歴史調査などの四川の民族政策・研究に関わってきた代表的な研究者である李紹明氏の口述記録などにそって、一九五〇〜六〇年代の民族研究の実態や政治性などの問題点が明らかにされている。

### 論文篇に関する若干のコメント

(1) 震災後の開発について、大きな流れが政府と住民の双方の側から示されている。移住によって村の解体や農民の非農民化が進みその就業構造が変化している趨勢、農村と都市の大きな格差の要因

である教育や医療に農民が対応を迫られる現状が示されている。農村の空洞化や都市との格差の問題は、多くの地域に共通してみられる現象であろうが、この地域では震災復興の文脈で突出してみられることが理解される。震災復興の方法として、政府側の突貫工事と住民の意識とのズレが示されている。著者の言うように民族文化の将来には住民自身によるボトムアップの力が必要であろうが、政策とのせめぎあいや妥協・協働など複雑な関係がみられる場で民族の幹部や知識人がどのように関わって住民の意志を実現していくのか、「借金は政府が何とかしてくれる」という農民の期待に政府がどう答えていくのかを含めて今後の動向が注目される。

ここで注意したいのは、第二章で示されているように、移住によって村落が解体しても伝統的な社会文化が維持され、村の共同体としての紐帯が強く意識される点である。この点は、村の合議の仕組み「議話坪」や親族間の強い互助関係（直台村）、葬儀や年中行事に旧村に戻る

こと（雅都村、大寨村）、また文化については移住先での客人をもてなすための部屋や多人数で鍋庄舞を踊ることのできる広い家屋（雅都村）にみられる。この点、第五章の黒水チベット族について、居住空間として、また村落の境界としての「溝」（谷間）、村の境界の重視、村規民約によって祭山会や婚葬などの共同作業を行うことや、人望が篤く年齢の高い者が村の秩序の維持や祭祀に参与すること、さらに住民が出席する寨民会議など、村落を単位とすることが示されている。現在でも村民の相互扶助や冠婚葬祭への参加などが遵守されているが、こうした村の自律性の高さがこの地域の社会を理解する鍵となるよう思われる。

なお、「溝」について、石碩「[2013]」によると、藏彝走廊はその自然条件から、河流を中心とした溝の兩岸台地が人々の居住と生活の場であるが、それはかつての土司の管轄地の範囲であり（ちなみに九寨溝は一溝の九寨を管轄）、通婚を含む交流、方言、習俗、意識の諸側面にお

いて大小の溝が一定の役割を果たしてきたという。それは地理的な特徴に着目した大まかな概念モデルに過ぎないし、実際には一つの溝に複数の民族集団が共存する場合、土司や仏教寺院の管轄地が溝を越えて広がっていた場合もある。この点、本書では各チベット族について随所で郷鎮政府や漢族が河谷に、チベット族などの少数民族は急峻な山腹斜面に居住するという実例（ナムイ・チベット族やリル・チベット族など）が挙げられている。そのことは写真篇でも示されている。しかし、高山によって隔絶され山腹峡谷に集落が作られる地勢はそこに住む人々の集団のありようにも影響を及ぼしたであろうと思われる、この地域の民族集団の分布、ひいては言語・習俗の特徴を把握する際にこうしたモデルは理解の助けになるであろうと思われる。

(2) 第四章以降で検討されている藏彝走廊の諸民族集団の祭山会とその特徴の共通性という指摘は、この地域の民族文化の形成史を理解するうえで重要で、震災後の状況とともに本書の大きな成果で

あり、チャン族と諸集団との文化の類似性・継続性の解明に近づいていると言えよう。

この点に関連して、第七章以降で、ボン教のラマとチベット仏教伝来以前の固有の信仰を伝えるシャーマンへの信仰とが諸集団の重要な紐帯であることが示されている。この地域のチベット族は、ボン教以外にも木里大寺に顕著なようにチベット仏教の影響も強いが、シャーマンが仏教のラマに経文を学び集落のリーダーとなり、シャーマンの儀礼とチベット仏教とが融合している（写真篇二〇五頁）こと、冠婚葬祭でもとくに重要な婚葬に仏教やボン教のラマが関与する（第八・九章）が、他方でシャーマンの役割も重視されている。この点、チオルテンジャブ [2015] は、チベット仏教が普及したアムドの青海省同仁県の村にシャーマンが存在し、病氣治療や紛争の解決を含む地域社会の安定に寄与してきたことを検討している。また小西 [2015] は、四川松潘県のボン教僧院の再建、僧侶の活動やチベット族住民を巻き込む宗教実

践について検討しているが、先行研究を押さえて、ボン教は、古代のボン、一世紀に組織化された宗教として教義体系をもつユンドウン・ボン、特定の体系に組み込まれずに人々の間で継承されてきた信仰が含まれること、また古代のボンとユンドウン・ボンとの継承性や現地の人々の実践を明確に分けることはできないことを指摘している。ボン教と土着の信仰との連続性は本書でも指摘されているが、村の「ボン教のシャーマン」（ナムイ・チベット族）はボン教や仏教の寺院の組織とどのような関係にあるのか、また最近の仏教復興運動との関係においてシャーマンの役割がどう変化しているのか、さらなる関心が湧いてくる。本書は小西氏とは視点が異なるが、ボン教やチベット仏教のチベット周縁部での形成史や実践の研究の蓄積に寄与するものと思われる<sup>③</sup>。

(3) 歴史について、「汎羌論」をとり、先住集団「西南夷」の「戈人」を仮定し羌を後発集団とし、史詩「羌戈大戰」に窺われるように羌が戈に勝つてそ

の文化を取り入れて北部・南部方言区のチャン族の地域性が形成されていった見通しが示され、李錦氏は「序」でこれを高く評価している。しかし、史料的な制約もあって実証が十分ではないように思われる。中国では歴史の政治的利用が顕著で、郷土意識と相俟って、史料的な裏付けが不十分でも民族起源論が展開されがちだが、この点、より慎重な姿勢が要請される。

とはいえ、本書では、古代羌の南下移動以外に、吐蕃末裔伝承、吐蕃に敗れて移住した伝承や土司の西藏由来伝承、清代以降の漢族の進出など、漢族とチベット族との間の諸集団の移動を示す事例が挙げられている。先の共通の基層文化の存在に歴史的な人の移動の背景があることが窺われる。そうした点では、この地域がまさしく諸民族の「走廊」であることを物語っていると見えよう。

## 写真篇

第一部では、筆者が定点調査を行ってきた茂県雅都郷と理県蒲溪郷を中心

にチャン族の日常生活の変化を示している。一九八〇年代末の変化が生じる直前の時期から二〇〇〇年代の農村部における都市化の流れ、村の解体と村民の移住、震災後の復興と再建、観光化によって地域全体が大きく変貌していく過程とそれらにもなつて村民の生活がどのように変化したのかが示される。第II部では、各チベット族やプミ族、ナシ族について、二〇〇〇年代前半までの旧来の習俗とそれらの一部が近年の観光開発によつて変化を遂げつつあることが示されている。

写真篇では峻険な自然環境や壮観な石碕、臨場感あふれる人々の冠婚葬祭や日常の生活など、本書ではじめて公開された写真が多く、どれもインパクトが大きいく、蔵彝走廊に暮らす諸集団の理解を促進する。ただし、茂県の一九八九年の葬儀や近年の婚礼、理県の一九九四年の祭山会、ギャロン・チベット族や白馬チベット族など論文篇では取り上げられなかったものが掲載されている。写真にはわかりやすいキャプションが付けられて

はいるが、本書ではじめて著者の研究にふれた読者に対して、それらを提示することの意図の説明にもう一工夫ほしかった。この点が惜しまれる。

写真は現地のその時点の事象を、時には文字媒体によるもの以上に雄弁に物語る表象手段として有効かつ重要な方法である。膨大な写真を論文篇とあわせて刊行したことは、筆者のこの地域の諸集団に関する長年の調査研究の成果を示す意欲的な試みである。

### おわりに

本書は震災復興や諸集団について、家族や親族、衣食住、経済、婚葬、年中行事など諸方面から生活文化とその変化を主要なテーマとして、地道なフィールドワークを重ねて民族側の動きを発信し大きな成果をおさめている。こうした現地に住む人々の暮らしに対する深い関心は、著者がこの地域の調査研究をはじめた一九八〇年代末から四半世紀の間、一貫している。読者の一人として著者の姿勢に対する共感と敬意を表するとともに

に、本書が今後多くの研究者に読まれ、議論が深まり、蔵彝走廊ひいては中国南部民族集団の研究のさらなる進展に寄与することを確信している。とともに、写真を通じた民族誌の手法をはじめ、本書で提示された多くの貴重な事例や丹念な記述の評価は評者の力量をはるかに超えている。不足や錯誤の点は識者の御指正・御高見を仰ぎたい。

### 注

〈1〉第五章の末尾に一九三〇年代の「松灌」交易路と物資を一覧表として示しているが、塩・茶・綿布などの生活必需品を含む交易は重要である。チャン族地域における交易品と工夫による物資運搬をも含む人々の交易への関与は松岡 [2000] で検討されているが、できれば蔵彝走廊全域における交易の実態について、物資の往来や交易路を地図をも駆使してどこかで提示してほしかった。急峻な高山地域ではかく自給自足的な面が強調されがちであるが、交易は人々の暮らしにとって不可欠であり、蔵彝走廊の理解にとっても重要であろうと思わ

れる。

〈2〉 祭山会のチャン族と各チベット族との共通性については松岡 [2000: 311-316] で見通しが示されているが、本書で調査を通じて検証されている。

〈3〉 ただし本書で挙げられている参考文献を見る限り、ボン教に関する先行研究は多くは引用されていない。小西 [2015] などに紹介されているようにアムドのボン教やチベット仏教に関する研究は欧文も含めてそれなりに蓄積があるようで、この点は課題であろう。

〈4〉 理県の祭山会や白馬チベット族の儀礼の過程については松岡 [2000] で、ギャロン・チベット族の石碣の意味と観光化については松岡 [2017] で検討されている。

〈5〉 蛇足であるが、本書の副題「2008汶川地震後の再建と開発」は主に前半の第一部第二章・第三章で記述され、第四章以降は蔵彝走廊におけるチベット族や他の諸集団に関してである。この点からすると副題の表記に工夫が必要であろう。

#### 参考文献

小西賢吾 2015 『四川チベットの宗教と地域社会——宗教復興後を生きぬくボン

教徒の人類学的研究』風響社

チヨルテンジャブ(喬旦加布) 2015 「チベットアムド地域におけるシャーマンの職能者「ハワ(Ha ba)」についての考察——レブコン・ワオツコル村を中心に」『日本西蔵学会会報』第六一号、六一—七四頁

松岡正子 2000 『中国青蔵高原東部の少数民族 チャン族と四川チベット族』ゆまに書房

松岡正子 2017 「ギャロン・チベット族における「碣」の記憶と資源化——四川省丹巴県の「碣」を事例として」塚田誠之・河合洋尚編『中国における歴史の資源化の現状と課題』国立民族学博物館調査報告(SER)一四二号、二三九—二六二頁

石碩 2013 「蔵彝走廊『溝域』文化現象対族群理論的挑戦與啓示」『中日人類学理論刷新與田野調査』国際学術研究会報告レジュメ、中国社会科学院民族学與人類学研究所・日本国立民族学博物館主辦、二〇一三年一月一八日—一九日、於北京・中国社会科学院民族学與人類学研究所